

ブーメランは格闘技だ スポーツ競技として脚光

1993/10/26 毎日新聞 大阪夕刊 3ページ 1525文字

遠くに投げたつもりなのに、クルクル回転しながら手元に戻ってくるブーメラン。もともとオーストラリアの先住民、アボリジニが狩猟や戦闘に使用した。そのブーメランが最近、スポーツ競技として脚光を浴び始めた。既に世界的にブームになりつつあり、来年8月には神奈川県平塚市で世界大会が開かれる。(望月靖祥)

ブーメランは、投げて捕るだけの単純なイメージがあるが、実は技術、筋力、瞬発力、持久力が求められる。選手はけが防止のためゴーグルと手袋を身につけ、野球の本格派投手のようにオーバースローで思いきりよく投げ出す。時には時速一〇〇キロを超えるスピードで戻ってくる場合もあるだけに危険が伴い、集中力も必要。

日本では、戻る正確さ、投げる速さ、滞空時間などを競う5種目があり、各順位点の合計で総合成績を決定。選手は半径2メートルの円内から投げ、係員が飛距離やタイムを計測する。屋外で行われる場合が多く、気象条件が大切なチェックポイントで、選手は風に合わせてヤスリで削ったり鉛板を張って重さを調整する。

ブーメランの語源は、アボリジニが「く」の字形の飛び道具を指した言葉。それが最近、競技用にスピードや投げやすさを追求した結果、手裏剣のような三枚翼型が主流になった。材質はベニア板が主で、ほとんどの選手は自分で作ってしまう。

◆来年8月には日本で世界大会

海外では一九七〇年代の初め、米国、豪州などでスポーツとして確立された。日本では八二年に「日本ブーメランの会」が発足。八六年には「日本ブーメラン協会」(東京、先光吉伸事務局長)に改組され、会員も二百人を超えた。

今年四月には大経大で日本初の学生同好会「ブーメラン研究会」も誕生。国内大会で六位入賞の経験もある梅井とがい靖弘主将(4年)は「けがが多いのが難点だが、自分で作ったブーメランが手元に戻ってきた時の感激は言葉にできません」と楽しさを語る。

先光事務局長によると、日本の実力は「世界の真ん中程度」という。7年後のシドニー五輪は、ブーメラン発祥国だけに公開競技採用の可能性もあり、日本も来年の世界大会をきっかけに実力アップを図る構えだ。

◆なぜ戻ってくるのか? コマの回転運動と同じ

なぜブーメランは戻ってくるのか。大経大で数理学を教えるかたわら、ブーメラン研究会の顧問を務める西山豊・助教授は「コマの動きと同じ」と説明する。

コマは回転が落ちて倒れそうになると、グルリと円を描くように回り出す。これは回転運動体が持つ、自らの姿勢を安定させようとする性質のため。

ブーメランは、一定方向に浮力を生じさせるため、飛行機の翼と同じように断面がかまぼこ型になっている。この浮力のため、地面と垂直に投げ出すと自然と横倒しになろうとするが、同時にコマと同じ動きも起き、戻ってくるという。

つまり、ブーメランが戻ってくるようにするためには垂直に投げることに、強い回転を与えることが条件になる。

◆挑戦しませんか

日本で行われている種目とルールは以下の通り。

【正確さ】20メートル以上の距離を投げ、半径2メートル以内に戻れば10点。2メートルごとに2点減点、5回投げた総得点で争う。

【ファーストキャッチ】20メートル以上投げ、キャッチ。その動作を5回繰り返し、所要時間を競う。

【滞空時間】投げて捕るまでの時間を競う。50メートル以上の距離を投げてはいけない。

【オーブアラウンド】飛距離、正確さ、キャッチを同時に競う。飛距離が長く、正確に戻るほど得点は高く、キャッチの得点も飛距離ごとに決まっている。

【トリックキャッチ】自由、右手、左手、背中キャッチ、股(また)の間で捕る股下キャッチ、両足で挟んで捕る足キャッチがある。